

佐賀県開催 <おつごろうラウンド>



H24.10.13(Sat)

佐賀大学



スポーツの秋、真っ只中での開催で、県内外の先生方は文化祭や部活動の新人大会などで、学校で頑張っている先生方の出席は少なかったのですが、県外から 17 名。県内から 9 名の先生方の参加をいただき、体育の授業づくりや評価について熱く語り合うことができました。



1 実践報告：小学校教員養成課程 ～どうなる教員養成課程～



佐賀の「こういちお兄さん」こと佐賀大学の堤先生から、教員養成大学の教員として、学生を通して感じていることについて実践報告をいただきました。中教審答申では「教師に求められる資質や能力」は、①教職に対する強い情熱②教育の専門家としての確かな力量③総合的な人間力と示されており、授業についての信念・知識・技術が必要であり、反省的実践家として成長し続ける教師でなければならないこと、加えて、「学び続ける教員」でなければならないと熱く語っていただきました。改めて、教員として学ぶことの大切さを感じました。

2 研修報告：球技・ネット型の授業づくりを考えよう。

子どもの体力向上指導者養成研修の講師としてご活躍の多い九州。今年度、球技：ネット型(バレーボール)のコースで、西部地区に北九州市の青木先生、東部地区に佐賀の福井が講師 2 として参加してきました。

研修では、球技をどう型として捉え、どのような動きを、どのように考えるのか、どのように向き合うのか、どのように指導し評価するのかを、しっかりと押さえることから始まり、授業づくりのアイデアを出し合い、ねらいに合った子どもたちの活動の中で、技能の習得はもちろん、思考・判断の場面設定の工夫について研修を深めたことを報告しました。



私たち体育人は、球技を型として捉えることにより、生涯にわたって運動に親しむための共通する動きや技能を身に付けることの重要性や固定概念にとらわれない簡易ゲームやドリルゲームを考えることで、子どもたちに新たな興味・関心を生み出させ、知らず知らずのうちに技能の習得が図れたという授業の仕掛けづくりの大切さを伝えていかなければならないと強く思います。

例えば、投げ上げトスからのゲーム、ネット下からアタックゲーム、キャッチングゲーム etc

3 模擬授業：高 1、球技「ネット型：バレーボール」



地元の高校のバレーボール部の協力を得て、高等学校入学年次の球技：バレーボールの授業をVTRに撮影し、皆さんに見ていただき授業研究会を行いました。学校現場を離れは 5 年、また高校生に授業をするのは講師時代以来で、すっごく緊張しました。

模擬授業の内容は、「インニングゲーム」という、相手チームからのサービスを 3 段攻撃で返すもので、その 3 段攻撃でポイントを取ったら 3 点、ラリーを続けられたら 1 点、失敗したら 0 点となるベースボール型でのネット型バレーボールの活動です。

バレーボール部ということで技能レベルの高い集団であったために、活動に対しての満足感や充実感が浅く、活発な活動にはな

らなかった、生徒の実態・技能レベルに合った学習内容の設定が必要であった。3 インニング終了後、作戦を立てる話し合い活動を設定したが、これも活発な意見交換ができず、日頃から話し合い活動の設定や教師の

声かけ、ワークシートの工夫の必要性を感じた。

ベースボール型のバレーボールであるので、どうすれば点数を取られないようにするのかなどにディフェンス側に立った考え方をすれば、ブロックが発生したり、レシーブポジションを考えたりなどの思考・判断の場面づくりが出来るのではないか。

そうすることにより、本展開での評価「仲間に対して、技能的な課題や有効な練習方法の選択について指摘している。」という思考・判断について、見取りやすくなるのではないか・・・などの意見があった。

久しぶりに授業づくりを行い、生徒の興味・関心をくすぐり、学習意欲を高めさせる工夫やバレーボールの指導の固定概念をとらわれない授業のアイデア、それを基にした何を身に付けさせるのかを明らかにしていくことが大切だと感じました。

指導主事は「指導と評価の一体化」ですと常日頃、学校現場の先生方に言っていますが、やはり、生徒の実態や技能レベルをしっかりと見極め、学習内容の設定することの難しさも感じたところです。

やっぱり勉強ですね。まだまだ修行が足りません。



4 実践報告：「指導と評価の一体化を目指した授業づくり」全国学体研北海道大会予告篇

10/25 から行われる全国学体研北海道大会全体会のシンポジウムにシンポジストとして参加される佐賀県立香楠中学校の高木先生よりシンポジウムで事例提供される体づくり運動における指導と評価の一体化 ～体力を高める運動の運動計画の作成を通して～について、自らの授業実践を基に話をいただきました。

中学校第3学年の体づくり運動で、体力を高める運動の運動計画の作成し、それを実践することで、課題を発見させ、それをどう解決し自分にあった運動計画に修正するかという単元計画。

運動を実践させるための動機づけや思考・判断を育てる学び合いの方法、ワークシートの書き出し方など授業展開や評価の中での課題が浮く彫りになったこと。現在、健康な生徒たちに健康の意義を伝え、それをどう生涯にわたって運動に親しむ運動計画にするのかなどが課題になったという反省が出されました。

また、体づくり運動での「十分満足できる状況：A」の評価規準について、何をもって、十分満足と言えるのか、一つの評価規準にその高まりにもう一つ評価規準が乗かってしまったら（評価の軸がずれてしまっは）いかならうと皆さんで時間をかけて協議しました。



佐藤先生からは、大学の授業顔負けに板書を交えて、規準と基準のとらえ方、関心・意欲・態度や思考・判断は、見えにくい学力でありそれを評価するとなると、すごく難しいが、とても重要な要素。そのことに関しては、さらに学説の吟味や十分な議論を通じて、「十分満足できる状況：A」をどのようにとらえるのかといった共通理解をさらに進めていく必要がある。「十分満足できる状況：A」の姿は、情意、認知、技能のそれぞれの資質や能力の高まり方の違いに着目して、一律ではなく検討する必要があるのではないかと感じている。「おおむね満足：B」の評価規準の高まりの姿とはなにかを評価の信頼性と妥当性をふまえて設定していく。そこに、指導との関係性をどうつけるのかが教師の力量であるとまとめをいただきました。

評価については、まだまだスッキリしないことが多いものです。でも、教えたことを評価する、子どもの出来栄を評価するという基本的な考え方は揺るがないものです。みんなでもっと評価について、考えていきましょう。

(報告：ふくい)